

「^{ふくいし}覆石」の抜取痕跡が検出できました。その結果、基壇の大きさと位置がわかり、第二次大極殿院南門とほぼ同規模であることが判明しました。そのほか、南門の北側で朝集殿院内の遺構もみつかっています。今後は、北側の朝堂院にみられるような下層の掘立柱建物があるかどうかなど、遺構の確認調査を中心に、3月末までの予定で調査をつづけます。



朝集殿院発掘現場(北東から)

▲ 発掘調査の概要

朝集殿院南門の調査(平城第326次)

平城宮跡の壬生門の北側には、朝集殿院という区画があると考えられています。この区画はまだ部分的にしか発掘調査が及んでいないことから、奈良文化財研究所では、今後数年をかけて朝集殿院地域の発掘調査を計画しています。初年度は、朝集殿院の南門の存在を確認することを目的として2002年1月から発掘調査を開始しました。調査面積は約1050㎡です。

南門は後世の削平により、基壇上部はほとんど残っていませんでした。しかし、基壇を造る際、地面に穴を掘り、土を層状につき固めて強固な地盤にする「^{ほりこみじょう}掘込地業」と、基壇外縁に敷く化粧石である「^じ地